

帯広電信通商店街振興組合（長谷渉理事長）は7月から、空き店舗を活用して高齢者が交流したり、障害者に働く場を提供する新事業「たのしーむ電信」を始める。大通南5の真鍋薬局跡を商店街が借り上げ、障害福祉サービス事業所「帯広ケア・センター」（川西町、片平修所長）利用者が農産物などを販売する店舗を開設する。関係機関や企業で構成する運営委員会を立ち上げる。

# 電信通商店街が新事業「たのしーむ電信」

## 高齢者、障害者との共生へ



店舗の開設場所となる帯広市大通南5の真鍋薬局跡

空き店舗  
活用  
福祉施設の  
物産販売など

「お年寄り、障がいのある方と、協働・共生する商店街」がテーマ。空き店舗に商店街の不足業種を補充することで、来街客の増加も目指す。店舗面積は62・8平方メートル、7月末のオープンを予定している。全国商店街振興組合連合会の「商店街実践活動事業」に採択され、100万円の補助が決定している。

店舗では「帯広ケア・センター」が十勝産の農産物を販売、チーズなどの加工品、手作りクッキーなども扱う。

帯広開拓の祖依田勉三の出身地で、開拓姉妹都市の静岡県松崎町の郷土品も展示する。電信通はかつて「晩成社通り」「依田通り」と呼ばれ、1988年には松崎町の「新

浜コミュニティ通りの商店会」と姉妹商店街を提携している。

同事業は来年1月中旬までの実施を予定しており、採算性などを考慮した上で継続の

是非を検討する。長谷理事長は「気軽に入店でき来店客同士の交流が生まれる場にした」と話している。

（大谷健人）